

九州みなと便り (10月号)

●志布志港

砕氷艦「しらせ」が志布志港に寄港しました

【寄稿：志布志港湾事務所】

9月23日から26日にかけて、海上自衛隊所属の砕氷艦「しらせ」が志布志港新若浜地区に寄港しました。これは、南極への渡洋前の訓練の途上に志布志港に寄港したもので、地元志布志市や志布志港を利用する民間事業者など多くの方々のご協力により志布志港への初の寄港が実現したものです。

砕氷艦「しらせ」は、南極観測のために文部省(現文部科学省)が建造し、海上自衛隊が運航している船で、海上自衛隊の自衛艦の一つとして南極の昭和基地に観測隊員や物資を輸送するとともに海洋観測を行っています。

志布志港には23日に入港、26日に出港し、間の翌24日から25日の2日間一般公開されました。この一般公開では、志布志市民をはじめとした鹿児島県民や、九州各県から来場された多くの方々が「しらせ」に乗艦(4,855名)し、船内の装備品の見学や任務内容の説明を受け、特に「南極の氷」展示ブースでは、実際に氷に手をかざし数千年前の空気が手の中で弾ける神秘的な感覚を驚きとともに楽しまれていました。また「志布志特産品展示会」や自衛隊車両の展示、制服試着コーナーが設置されるなど、自衛隊の活動や地元「志布志市」を広くPRする機会としても盛大なイベントとなりました。

志布志港では、今後も港湾を舞台とした「賑わい」や「憩い」の機会を創出し、志布志港とともに地元「志布志市」の魅力発信に努めて参ります。

★「しらせ」豆知識

①文部科学省では「しらせ」を「南極観測船」と呼んでいますが、防衛省では「砕氷艦」と呼んでいます。

②(砕氷のしくみ)氷厚約1.5mまでの氷は、強力な推進力で連続的に砕氷して前進します(連続砕氷)。氷厚約1.5m以上の氷は、いったん艦を200~300m後退させ、最大馬力で前進し、氷に体当たりするとともに氷に乗り上げ、艦の自重で氷を砕きます(ラミング(チャージング)砕氷)。この様にしらせは「厚い氷に体当たり」することを前提としているため、氷の海で進みやすいように船の底が丸く、また氷に接触するアイスベルトと呼ぶ船体の部分は高張力鋼を使って頑丈に作られており、船首部分のアイスベルトの厚さは45mmもあります。ただし、実際に「氷への体当たり」を経験した観測隊員の方によれば「氷への体当たりは数日、長いときは1週間程度、昼夜を問わず続く」とのことであり、今日でも南極に到達するためには「しらせ」搭乗員の方々の大変なご苦労を伴っているのです。

(出典1)海上自衛隊ホームページ(<http://www.mod.go.jp/msdf/formal/gallery/ships/agb/shirase/5003.html>)

(出典2)「南極サイエンス基地」(<http://polaris.nipr.ac.jp/~academy/science/shirase/shirase01.html>)



砕氷艦「しらせ」



入港時の歓迎式典



艦内一般公開の様様子(「南極の氷」展示)



志布志特産展



自衛隊車両の展示